

授業方法について独自に工夫していること 【教育科学系】

1年生前期の授業であるので、前半は、「知的障害者の教育課程・指導法」の内容とともに、特別支援教育の基本に関わる内容も講義し、2回目以降はほぼ毎回前授業の内容の小テストを行って、基本的な事項の習得を促した。授業資料は、学生が効率的かつ主体的に学べるよう、PPT資料、小テスト(事前に配布し、暗記を促す)、授業に関わる新聞記事、授業に関わる文部科学省等の公的HPなどを用意した。後半は、映像鑑賞後のグループディスカッション等、アクティブラーニング的な手法も取り入れ、学生同士で学びを深められるよう工夫をした。また、学生が視野を広めることができるよう、ゲスト講師(知的障害者支援のNPO法人スタッフ、障害者自立支援のNPOスタッフ)の講演の回も設けた。

学生の授業前の事前学習を基に行っている。

できるだけ具体例を挙げ、興味を持てるように、また、できるだけ系統だった知識を提供できるよう心がけた。また、なるべく平易な言葉でゆっくり話すようにした。板書は要点のみを簡潔に書くように心がけた。一方通行の授業にならないように、適宜、質問等を行ったり、理解を深めるため必要に応じて計算をさせたりした。

できるだけ具体例を挙げ、興味を持てるように心がけた。また、病態生理についても適宜説明した。また、なるべく平易な言葉でゆっくり話すようにした。板書は要点のみを簡潔に書くように心がけた。一方通行の授業にならないように、適宜、質問等を行って理解を深められるよう工夫した。

・いずれの科目についても最新の医療情報を収集し、常に新しい情報を取り入れた授業内容になるように工夫しました。
・救急処置に関しては、学校現場での対応を想定して、「児童生徒に声かけをしながら処置を行う」ようにと指導しました。また、実際にAEDを使用して助かった方、AEDを使用しなかったために助からなかった方のDVDを観て、学校現場で迷わずにAEDを使用して救命処置ができるように意識づけをしました。
・臨床実習Ⅱに関しては、保健医療現場での学びを常に学校現場に置き換え、養護教諭としてどのように活かすかを考察するように指導しました。

幼稚園教育の全体像と対比させながら保育内容(環境)について説明を進めている。第1講で全体のガイダンスを行い、第2講で、近隣の洲原講演に散策に行き、幼児の気持ちに引き込んでいる。講義期間の途中で中学校教育実習が行われるので、この時期に、保育内容(環境)の指導実践を教科書から事例を取り上げて、各自に行わせている。最後に、3回目のレポートとして、幼稚園教育要領、保育内容環境の指導内容11項目のうちから1項目を取り上げて、その内容について報告をさせている。レポートの配分はよいと思っていたが、学生にとっては容易だったようで、51.6%の学生がこの授業のための週当たりの学習時間を「なし」と答えている。小生にはかなり不思議な結果である。

理論と実践の統合を目指して、多くの保育実践映像や保育園参加を基に、理論と結びつけて授業展開するよう心がけました。学生個々の気づきや発見をなるべく共有し合えるように、グループディスカッションや発表も取り入れました。

集中講義形式であるため、授業で扱う内容と分量については工夫をしました。特に1コマあたりで教える内容を減らし、その分、学生間の協議等を行う時間に充てました。また、学生からのコメントをワークシートで集約し、質問に回答する時間を午後に設定しました。これにより、学生の集中力が低下しやすい時間帯も学修が確保できたと考えます。

講義科目はweb講義を使った反転授業、演習科目はグループワーク、ディベートなどを取り入れてアクティブラーニングとしている。

・こちらが教えたいことよりも、学生が学びたいことを中心に講義を進めるように心がけています。
・学生からの発言がなかなか出ないときは、“雑談タイム”をとって2、3人で自由に話してもらい、そこで話したことを全体にシェアしてもらうようにしています。
・ミニレポートを全員分コピーして学生に配付し、お互いが考えていることが分かるようにして、ディスカッションを行っています。

SPSSという統計ソフトを用いてデータ分析や統計処理を行う授業なので、実際のデータを用いて分析し、その結果をどのように記述するのかをわかりやすく伝えるように心がけた。

1. 講義では、教科書の内容にプラスして、なるべく最新の知見を入れて講義している
2. 講義では、レジュメではなく、なるべく資料の中から読み取るもの(新聞記事や、法律の全文)などを用意している
3. あらかじめ、予定表を配布して、基本的にその時間通りの進行としている
4. 採用試験を意識して、そのために必要な内容は講義に盛り込んでいる
5. 実習では、自作のテキストを用意して、その手順に従って各自が作業を行い、その時間内でレポートを提出させている
6. 実習の内容は、卒業後の学校現場や卒業論文制作で生かされる実践的な内容にしている

・様々な手法を用いて、授業のほとんどをアクティブ・ラーニングで展開し、キャリア発達に必要な基礎的・汎用的能力の向上につなげている。
・グループを頻繁に入れ替えることで、人と関わる力の育成につなげている。
・ICTを活用して、職業調べを実施している。
・職業レディネステストを実施し、その結果を即時フィードバックしている。
・キャリアモデルとして、外部講師(NPO関係者)を招き、講演とワークをしてもらっている。

学生が興味をもつように、身近な昔話を題材として選び、歴史的な変遷を踏まえた授業になるよう、できる限り古い絵本資料を提示するようにしました。その上で、子どもたちがその昔話を享受して、なぜ?と思う部分を調べたり考えたりさせるようにしました。また、実習などで生かせるよう、現代の資料についても、保育の現場で多く取り上げることの多い絵本や映像資料をなるべく多く提示するようにしました。

出来るだけ、学生自身に実施させることにより、知識を深めさせるように努めている。

理論を学び、知識を身につけることも重視しましたが、ロールプレイングやワークを取り入れ、体験的に学べるよう工夫しました。また、学生同士の意見交換の時間を設けることで多様な理解の仕方を共有できたと思います。

夏季集中で2日間ということもあり、できる限り短期間に多くの人と関わることができるよう工夫しています。また本講義では、実際に学生自身が活動をするを通じて自身の将来を考え、キャリア形成できるような機会となるよう、様々なワークを取り入れて実施しています。

キャリアデザイン I から継続して受講することで、グループで働くことの意味を体験的に学習できるよう活動をいくつか実施しました。またゲスト講師の方をお招きすることで、社会(特に企業)における実情を学ぶことができるよう、配慮しました。

2年生と4年生(それも専攻が異なる学生)が同時に受講する科目であるので、学年による経験の違いが視野の広がりにつながるよう、活動する際のメンバーを工夫しました。また、既習内容にも差があることを踏まえ、そのギャップをあまり感じないよう、それぞれのもつ強みに焦点をあてて授業を展開しました。

授業内容のテーマごとに担当者(2名一組)を決め授業の3週間前から事前指導を行い、担当者は調べ学習を中心に授業準備をする。

授業当日は担当者が授業者となり、他の学生に指導を行う。内容の不足分や現場の実際例等は教師が補足する。その後現場に近い場面設定をし、実習を行う。

実際の研究で行われた統計処理を疑似体験することにより、社会調査における統計処理についての理解を深めようとした。具体的には、実際に行われた研究の結果を部分的に再現できるような人工データを用いて、社会調査における統計処理の演習を行いました。

ほぼ毎授業時にテーマを提示しショートレポートを提出してもらい、学生さんたちの考えに触れる機会とした。また全員にコメントを記すことで授業担当者としての考えや思いを伝えた。

授業方法について、近年、アクティブラーニングやグループワークなどが盛んに取り上げられていますが、「お話の面白さ」という点から、通常の講義形式の意義を見直してみてもいかがでしょうか。講義形式が単なる知識伝達ではたしかにつまらないですが、「お話＝語り＝ナラティブ」という面で見れば、非常にポジティブな面が多々あるように思われます。それは、「カウンセリングにおいて、ただお話しをするだけでよくなっていくこと」ことや、「面白い本は、一人で座って読んでいても豊かに創造的世界を広げてくれる」のに似ていると思います。

社会教育活動におけるリスクマネジメント能力を鍛えられるよう、担当教員が実践現場から抽出した事例を用いて実践的リスクマネジメントスキルを学べるようデザインした。

学習内容の柱は現代的な健康問題に対応して求められている養護教諭の能力を身につけることである。独自の工夫といえないが、演習であることから、授業への出席、参加を大切に。グループワーク、ロールプレイング、ゲーム、模擬体験など多くすることで具体性を図った。学生の発信力や観察力、自己存在感が向上するよう、意見や感想を言う機会を多くした。授業の場で感じ、考えることを大切に、宿題のない授業とした。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【教育科学系】

授業態度、提出物等も多少考慮したが、ほぼ最終テストの成績で評価した。必修の授業であるので、最終テストの点数が60点に満たない者に関しては、追試を行い、追試の成績は優秀であったものの、60点で合格とした。授業を聞き、これまでの小テストをしっかりと勉強をすれば高得点を取れる問題であるため、S評価が続出した。

授業への参加の度合いと発表内容を主として総合的に評価した。

期末に行った本試験及び追試験の得点により評価した。追試験は、本試験で60点未満の者に行った。また、本試験の得点はそのままの点数を、追試験受験者に対しては、 $(\text{追試験の得点} - 60\text{点}) \div 4$ を60点に加えた点数を、成績として報告した。

- ・いずれの科目も実習科目であり、第一に授業への出席状況を重視し、実習時の参加態度および課題レポート等を総合的に評価しました。
- ・救急処置の技術の修得に関しては、実技テストで評価をしました。
- ・臨床実習Ⅱに関しては、実習記録等の記述内容から評価をしました。

出席回数、授業中の態度、レポートの取り組み方から平生点を算出した。また、3回のレポートを採点した。

授業に臨む姿勢とテスト結果は通じるものがあったように思います。
授業態度や製作物、レポートとテストから総合的に判断しました。

授業中に学生が執筆した課題の評価、単位認定課題の評価によって学業成績を出しました。成績評価を省察すると、80点以上の学生が9割を占めており、講義で設定した授業目標にほとんどの学生が到達したと考えています。

試験やレポートを実施している科目は採点をそのまま素点として評価している。実習科目などは条件を満たせばS、欠席や提出物の不備に応じて減点する。

- ・学生自身が講義を通して何を学んだか(レポートから)
- ・それについての自己評価
- ・講義への参加姿勢、発言内容
- ・出席日数

データに基づいて、統計処理を行い、その結果についてレポートを作成させるという「最終レポート」に、出席状況を加味して総合的に評価した。

講義科目は、毎回出席を取り、それを成績に加味したが、基本的には期末試験による評価を重視した。なお、試験問題は、主に授業で話した内容を中心に出题しているため、出席は多寡はあまり考慮していない(出席だけで、内容を理解していない者に単位を与えるつもりはない)。成績評価は厳密であり、毎年「不可」とする学生も複数いる。ただし、1回の試験だけではなく再試験を行い、その間に自主学習のチャンスは十分与えている。

実習科目は、出席と毎回提出させるレポートの内容を評価と対象とするが、授業のまとめである最終レポートにも一定のウエイトを置いて、評価に加えている。

科目の性質上、アウトカム評価が難しく、実質的には学生の「努力」を評価せざるを得ない面がある。

シラバスに記載した目標が達成しているかを、やはりシラバスに記載した評価の基準・方法に従って一度7段階に分けて評価し、その後もう一人の担当の先生とご相談しながら貴校の成績評価提出の様式に合わせて点数化しました。

出席状況・授業態度・定期試験(筆記試験)により総合的に評価した。

授業内の取り組みと定期試験結果から総合的に評価しました。授業内は、学生がそれぞれ積極的にグループワークに参加していましたし、試験では、教科書や資料の持ち込み不可の試験であっても学生はおおむね高得点を獲得していました。なお、試験では、知識の定着だけでなく、授業で得た知識を現場でどのように活かすか等について各自で理解を深めたこともうかがえました。

講義内でのワークに対する積極性、活動に対する振り返りの内容を踏まえて評価を行いました。

活動や講義への積極性や、グループワークの際の貢献を基に評価しました。

講義内のグループワークへの貢献や、発言の積極性、最終課題の得点を総合して評価しました。

- 1 授業中の態度や発言状況等
- 2 授業担当者としての取り組み、意欲、当日の授業状況等
- 3 課題レポートおよび当日の授業に関する感想、意見、気づき等のミニレポート

演習の授業であるため、出席状況を重視して成績を評価しました。

最終時に実施した試験の点数と、ショートレポートによる「学びの意欲」と「自分自身の意見を伝えようとする意思」を3ランクで評価し、合算した。

評価は、数回のレポートでおこなうものと、知識を問う筆記試験型のものとの、講義の内容に応じて使い分けている。それに加え、出席や授業中の発言などを加味している。レポート課題については、単にインターネットで検索した辞書的な回答をするのではなく、自分の考えを論理的にまとめているものには高得点を配した。レポートの書式が整っていないもの(表紙がない・短すぎる・引用が不適切)は大きく減点している。

社会教育の実践的諸課題について追及するとともに、実践的力量的形成をめざした。したがって、評価の基準は、①実践を通じた問題(課題)の発見力、②実践的スキル・知識に関わる学び についてどの程度かを実践報告会における発表から評価した。

- 1 レポート課題の記述から養護教諭の職務・役割の知識や特性を理解しているか。養護教諭になる意欲があるか。レポートの提出率。
- 2 発表時の参加度、態度・協働姿勢、積極性。
- 3 討論等への参加度。
- 4 出席数。

アンケート結果を受けて改善したいところ 【教育科学系】

前項に関連するが、追試対象者を適正な数に抑えるため最終テストの難易度が下がり、S評価が多くなり過ぎている。小テスト関連以外の問題を増やすことで、最終テストの難易度を上げることも検討しなければならない。アンケートについては、おおむね良好な評価を得ていると感じる。ただ、授業の進行を配慮してか、あるいは学生自身の主体性の不足からか、授業中の質問があまり出なかったように思うので、質問が出やすい雰囲気醸成するよう努めていきたい。

「話し方は聞き取りやすい」、「説明はわかりやすい」の項目で「あまりそう思わない」と回答した学生がいたので、より分かりやすくなるように改善したい。

(この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた)の質問に対して『強くそう思う』が16.2%『ややそう思う』が59.5%であるのに対し、(学習目標が達成できた)の質問に対しては、『強くそう思う』が2.7%『ややそう思う』が21.6%で、多くの学生はあまり目標が達成できたとは思っていないようである。また、(授業で提示された課題を、自ら検索し考えた)の質問に対しては、『強くそう思う・ややそう思う』が18.9%、(授業の難易度)の質問に対して『難しい・難しすぎる』が83.8%であり、新しい知識は身についたが内容が難しく目標を十分達成するには至らなかった、と解釈できる。今後は、授業内容を厳選し、深い理解が得られるよう丁寧に講義するとともに、適宜課題を課し、自己学習を促すように工夫したい。

(この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についた)の質問に対して『強くそう思う』が24.3%『ややそう思う』が64.9%であるのに対し、(学習目標が達成できた)の質問に対しては、『強くそう思う』が10.8%『ややそう思う』が40.5%で、目標が十分達成できたとは思っていない学生も半数近くいるようである。また、(授業で提示された課題を、自ら検索し考えた)の質問に対しては、『強くそう思う・ややそう思う』が32.4%、(授業の難易度)の質問に対して『難しい・難しすぎる』が54.1%であり、新しい知識は身についたが内容が難しく目標を十分達成するには至らなかった学生も半分くらいいる、と解釈できる。今後は、授業内容の説明を工夫するとともに、適宜課題を課し、自己学習を促すように工夫したい。

・校内の実習科目である救急処置に関しては、最新のガイドラインに準拠した授業になるように、常に新しい情報を収集して学生に教授するように留意したいと思います。また、「将来、養護教諭として適切な処置および保健指導ができる」ことを念頭に、技術の修得とともに児童生徒および教職員に対して保健指導ができるレベルを目標に設定したいと考えます。

・学外の実習科目である臨床実習Ⅱに関しては、外部の保健医療施設における臨地実習であり、実習施設の実習担当者との綿密な事前打ち合わせと事後報告をこれまで以上に実施したいと考えます。なお、学生の自由記述欄の記載にあった帰りのバスの乗車については、実習施設での乗車は一般の方に先に乗車していただき、ご迷惑はかけていませんでした。途中のバス停で一般の方が乗れなかった事があったかもしれませんが、その可能性を想定して学生を分乗させるかどうかは今後検討したいと思います。

問1①と②回答が74.2%なので、小学校教員になる学生に、幼稚園教育の風を送ることはできたと自負している。問2:同32.3%、問3:同35.5%、問4:同35.5%、・・・問13「授業の難易度」ちょうどいいが80.6%で、まあこれぐらいかなと思う。この自己評価(2)で記入したとおり、やや自宅学習時間が少ないは気にかかるが、卒論、教採を同時進行している4年生ということを考慮すると、指導者としては今年何とか合格点かなと思います。来年も講義があれば、本年のように学生の状況をモニターしながら授業を進めていきたいと考えている。

大変意欲的で、思考の柔軟な学生が多く、私自身、授業が楽しかったです。

後期からの授業も、学生との双方向的な授業展開に努めたいと思います。

「この授業のための週あたりの学習時間」について、1時間未満から3時間以上と学生によって差がありました。

保育や実践、理論に対する学びへの意味をより明確にし、どの学生に対しても授業外での自身の自発的な学習が保障されるように後期からの授業は工夫していきたいです。

外部講師による集中講義であるため、教材・教具の使用に制限があります。しかし、インターネット等を活用して教材を準備する等の工夫・改善が可能であると考えます。

また、アンケート結果から、授業内容の復習・予習に充てる時間が不十分であると考えます。集中講義の開始前の予習を指示すること、反転授業型のデザインを考えていく必要があると思います。

授業内容が難しいというアンケート結果があるので補習などで対応できればいいが、授業数が多いので通常の授業期間での対応は不可能。補講期間や長期休暇中に対応するしかない。

・学生とのコミュニケーションがもっと取れるような工夫(メールでの質問等)を検討しようと思います。

おおむね好評価であったが、授業の難易度では、「ちょうどよい」が40%であったのに対し、「難しい」が50%であった。高校時代に統計に関する授業をしっかり受けていない学生には、やや難しい点があると思われる。このような学生が分かるような授業を試みたい。

自ら学習する、自ら考えるための授業はできていないと感じているが、そのためには内容を減らすか、逆に時間を十分かける必要がある。採用試験などを意識すると、伝えるべき内容が多いので、現状では、多少詰め込み的な授業であってもやむをえないと考えている。

「問11 教員とのコミュニケーションはうまくとれている」の部分について、「強く・ややそう思う」が50%程度に留まっている。8回の集中講義であり、グループワークが大半なので教員と会話する場面は限られるが、できる限り1対1で話す機会を増やしたい。

いただいた結果を見る限り、肯定的な評価を付けてくださっているようなので大きく変えるところはないように思いましたが、よりわかりやすく学生さんがより興味をもってもらえるように努力したいと思います。特に、問6で約6割の学生が深め合ったと述べているが、約3割の学生がどちらともいえないと述べているので、もっと学生同士が考えを深める時間を増やしたいと思いました。

自身が意識して工夫した点については学生からの高評価を得ていましたが、参考文献の紹介や、学生自ら授業外で学べるような知的刺激を与えること等ができていなかったと思います。これらの点は改善が必要だと思われる。

本講義は、新たな知識を修得したり学問として学ぶことよりは、実際の活動を通じて受講生の意識の変化や、将来に対するものの考え方の変容を促す内容になっていたことに加え、2日間連続で実施したため、どうしても「さらに学びたい」「週当たりの学習時間」「自信での検索・参照」に関わる項目はあてはまらないという回答が多くみられました。この点はやむを得ない結果であったと考えています。受講者数が予定よりかなり多かったことで、取り組みづらさを感じた方もいたようなので、その点は今後検討していきたいと思います。また、自由記述に複数みられた「活動中に話すのはやめてほしい」という点については、配慮が足りなかったため、今後留意していきたいと思います。

2日間の集中講義ということで、週当たりの学習時間が少なかった点はやむを得なかったと考えています。その他、一回の学習内容がやや多かったという声もあった点については、ゲスト講師の先生ともさらに検討し、内容を精査していきたいと考えています。

講義の難易度が短いという回答や、一回の授業内容の量が多いという回答が一部見られたので、その点については今後再検討していきたいと思います。

当日の授業担当者を除いたフロアーの学生の参加意欲をいかに引き出すか、また授業後さらに考えを深める手立てを工夫したい。子どもの人権、発育発達の保障、学習権の保障等について考慮しながら執務ができる養護教諭養成が必要である。そのための工夫もしたい。

アンケートでは授業内容が難しかったという回答が多く見られました。統計自体の理解が難しいことに加え、演習で用いた人工データでは統計処理の結果を実際の研究と部分的にしか一致させることができないため十分な疑似体験にはならなかったことや、研究の内容についての理解が不十分なまま統計処理を行ったことなども影響していると思われるので、改善策を検討したいと思います。

所属大学ではマイクを使用することが常だが、マイクなしでも聞き取りが十分できるよう声の大きさの改善を心掛ける。「養護教諭論と何も変わらない」との自由記述には驚いたが、重なる部分があるのは当然でもあり重要なところと考える。しかし、授業担当者間で意見交換をし、内容を検討していくことを心掛ける。

アンケートの結果から、「内容の興味深さ」や「講義のわかりやすさ」については、おおむね高評価であった。一方で、問3の「自分で調べた」、問11「教員とのコミュニケーション」については相対的に評価が低かった。講義の構成として、学生にとってやや受け身のものであったかもしれない。今後は、「リアクションペーパー」や「グループワーク」などを取り入れ、学生の積極的な授業へのかかわりを増やしていくことを考えたい。

改善したい点としては、本講座受講者に対し、野外教育のリーダー資格を付与することを検討している。モチベーションアップ及びキャリアアップのサポートになるのではないかと考えている。
本講座は、学齢期の児童生徒を対象とする野外教育の実践を提供しているが、講義内容は国立青少年教育振興機構などで構成する全国体験活動指導者認定委員会が定める「自然体験活動指導者（NEALリーダー）」の養成カリキュラムの条件を満たしており、担当教員は当該養成カリキュラムの公認トレーナーである。したがって本講座終了時に認定試験を実施することでNEALリーダー資格の取得は可能となる。今後、学生たちのニーズをはかりながら結論を出していきたい。

- 1 授業内容の目的や内容の説明にもっと丁寧に、時間をかける。分かりやすい話し方をする。
- 2 提供した資料に学生が興味関心を持ち、学びを発展することを示唆できる資料を作成する。